

流れた唾き

長谷川時雨

青空文庫

神田のクリスチャンの伯母おばさんの家うちの家風が、あんぽんたんを甚しどくよろこばせた。この伯母さんは、女学校を出て、行燈袴あんどんばかまを穿はいて、四円の月給の小学教師になったので、私の母から姉きょうだい妹いの縁を切るといわれた女ひとだ。でも、当時を風靡ふうびした官員さんの細君になったので、また縁がつかつたものと見える。思うに私の母はちと癩しやくだったに違いない。家業は自分の夫の方が小粋こいきで、モダンなんだが、家風がばかに古くつて、伯母の家とはてんでおはなしにならない、違いかただった。

それも八十になるおばあさんがいるからだ——そう思ったことであつたらう。今考えると、月琴げつきんをかかえたり、眉毛まゆげをたてたりしたのは、時代の風潮ばかりではなく、このおばさんの、近代生活モダンライフにグツとしたのかも知れない。

しかし、その時分のモダンよのぶろしきは、四布風呂敷よのぶろしきほどの大きさの肩掛けをかけたたり、十八世紀風のボンネットや肩あてに当あてものをしたり、お乳ちちにもあてものをして、胸のところおしめで紐を編上げたりするシミズを着て、腰にはユラユラブカブカする、今なら襠褌おしめ干しにつかうような格好のものをに入れて洋服を着ていた時代である。江の島か鎌倉へゆくと、近所知己からお留守見舞というものをくれて帰つてくるとあの子は洋行をして来た——嘘うそではない。洋行

という新時代語と、道中とか旅とかいつていたのを、洋行というむずかしい言語で言いあらわそうとした間違いを平気で、いつてみれば、あの方がダラ幹さんという方？　ときく人がある、ああした生はんかな、物知り——そんな位なところなのだったのだ。もつとあとだつて、昨夜は大財産をなすつたなんて、財産と散財と、とんちんかんなのを、どうしても得とく出来なかつたものさえある。

私の家族は御飯のとき、向側の角が祖母、火鉢をはさんで父、すこしはなれて母、母の横から小さい姉妹が折曲つて、祖母の前が丁度私の居場所になる。みんな、各自のお膳を行儀よくひかえる。祖母は何もかも一番早くゆくから一番さきにしまいになる。すると、長い煙管をつけて監視人と早がわり、御飯粒ひとつでもこぼすと、その始末をしてしまわないうちは食べさせない。あたしは味噌汁が嫌いなので、ぽつちりとお椀の底の方へよそつてもらつてもついで残す。とにかく祖母の目はあたしにばかりそそがれているからたまらない、最後に、小言はいわずに、

「越中山、無限地獄に墮るぞよ。」

と、あたしのお残りへ白湯をさして飲んでくれる。あんぽんたんながら、それには恐縮して、老人の眼は悪かろうからと、だんだん後へさがつて座るのだが、お豆腐ぎらいのた

めに母が内密で半片にしてくれると、ちゃんと知っている。だから私はすべて襖のそとへ手をつけて——只今という機械人形のようなおとなしきだ。この祖母は、ぞんざいな者が傍へくると、近よらないさきから足を踏まれぬ用心に、あいたあいたと言った。と、いかなぞん気ものでも吃驚して立止まるか静かにあるくかする。一挙両得、叱らずに叱られずにすむ妙諦である。

そんな家から小官員さんの新家庭へゆくと、伯母さんは多い毛をお釜敷のような束髪にねじって、襟なしの着物で、おかみさんでもひっかけ（帯の結びよう）でなしに、ちりめんの前掛けも締めないで、机のような大きなお膳へ白い布をかけて、夕飯の時には若い牧師さんも来て座って、いろんなお皿が出てもすぐ食べないで、鉄ぶちの眼鏡をかけたその若い牧師さんが、小さな本を開いて、なんだかブツブツ言うのと、みんな頭を垂れていて、終いにアーメンと呟やいて額と胸とに三度十字をきる。でも、大人でも、よつぽど待どおしいと見えて十字は実に早くやる、お茶碗もすぐ口にもってゆく。食物は家のよりまずいが牛乳の缶は毎朝台所にぶらさがっている。伯母さんは鶏卵の黄身をまん中にして白身を四角や三角に焼くのが上手だ、駿河台へニコライ堂が建つとき連れてってくれたのもこの伯母さんだ。ヴィオリンの音や、ピアノや、オルガンの音をはじめて耳にしたのも

伯母さんの住居へとまりにいったからだだった。そのころ下町でそんな音色も、楽器も知っているものはなかった。あんぼんたんは外国の匂いにおを、ここではじめて嗅いだのだ。なぜなら神田は学問をする書生さんの巢窟そうくつであり、いまでいうインテリゲンチヤの群である。帽子をかむった人なんか、めったに見ない下町ツ子は、通る人がみんな白金巾しろかなきんの兵児帯へこおびをしめているのに溜息ためいきした。夕方は下宿屋の二階三階に、書生さんたちが大勢ですりに腰をかけていた。私は女がそういうふうをしているのを新宿（妓楼）で見たことを伯母さんにはなした。

南校なんこうの原はらでバツタやオートをつかまえて、牛が淵でおたまじゃくしを掬すくった。従弟いとことおまつちゃんと三人で、炎天ぼしになつて掬すくったが、入いれものをもたないで、土に掬すくいあげたのはすぐ消たように乾ひかたまつてしまった。三人は唾つばきをした。川の水に唾つばきをして唾つばきが散れば肺病ではないと、なにが肺病なのかよく知らないのに、幾度も幾度も唾つばきを吐はいた。すぐに散ちつてしまふと手を叩たたいて歓声たのしみをあげる。

帰かえると盥たらいを出して水をあびる。溝どぶに糸みみずのウヨウヨ動うごいているのを見つけて、家の金魚のおみやげだと搔かきまわ廻まわす。邸やしきまち町の昼は静かで、座敷を大きな揚羽蝶あげはちょうが舞いぬけてゆく。お砂糖水をこしらえようと砂糖壺つぼをあけたら、ここにも大きな蝶がじつとして卵

をしている——私たちはウワツと叫んだ、なにもかもが珍しいのだった。

だが、ふと、自分の家の午後も思出ささいではない。みんなして板塀へいがドツと音のするほど水を撒まいて、樹木から金の雫しずくがこぼれ、青苔あおこけが生々した庭石の上に、細かく土のはねた、健康そうな素足を揃えて、手拭で胸の汗を拭ふきながら冷たいお茶受けを待っている。女中さんは堀井戸から冷ひやつこいのを、これも素足で、天びん棒をギチギチならして両桶に酌くんでくる。大きな桶に入れた麩そうめん麵めんが持ちだされる時もあるし、寒天やトコロテンのこともあるし、白玉をすくって白砂糖をかけることもある。

——そのころの人は水の味をよく知っていた。どこの井戸はくせがある。この水は甘い、あそこのは質たちが細かい——女中さんは自慢で手桶のふたをとる。今日のは何処どこのですかおあてになつてごらんさいと——

金魚も水をとりにかえてもらつて跳おどり上あがつているのであろう。私の鉢おひのまるつこの子は、大きくなつたかしら、背中がはげてきたかしら、目高めだかがつつつきやしないかしら——

「ねえおまつちゃん、弁慶蟹べんけいかにね、なにを食べてるだろう。」

おまつちゃんもちよつと不安な顔をする。つくばいの吸込みの小さな穴へもぐつてしまつた弁慶蟹の子が、年々大きくなつて、片つぽの鉢はさみだけがやつと穴から出せる位に、吸込

みの穴の中で成長してしまった。右の手をだして、穴のまわりの青苔をはさんで食べていたが、もう手のとどくところには苔がなくなっていたのだ。根の赤い、ギザギザのある綺麗な、そして不具な片手が穴の中から差出されると、小さい時分にはよく掴み出してやっただ大人たちは、意固地に逃込むのを憎がって、この頃は手をだすのを見つけるたんびにぎまみやがれと言って笑った。子供はその大人を憎んだ。誰もがいないと、おまんまつぶを持っていつてやった。好きな沢庵もやった。沢庵を裂いてやるとよく知っていてはさんだ。此方からは見えなくつても、穴の中からは見えるのかも知れない、小さな眼が覗いていたのでもあろう。

私たちは小さな亀の子をほしがった事がある。壹銭銅貨位のや天保銭位の大きさのを買ってもらって悦んだが、餌に蚯蚓をやるので嫌いになった。私は蛇より蚯蚓が厭だ。蛇は下町にはいないから話以上伝説化した恐怖をもちはずるが、見たことがないから蚯蚓の方が気味がわるかった。その蚯蚓の太いのを、小さな亀が食べる。しかも、背中を突ツついても石つころのように堅くねむつてもいたようなのが、餌を見ると猛然と首を伸してかぶりつき、掌を拡げておさえる。大きさからいえばあんぽんたんが大蛇にむかつたようなのに、蚯蚓の胴中からは濁った血——液が出てくる。亀の子はお爺さんのような皺だらけ

な頸くびすじをのぼし、口は横まで一ぱいに裂け、冷やかな眼をうごかさずによせている。不思議なことに、後年よく見たのだが、その眼が蛇の目とおなじであり、口のかたちも似ている。もしもし亀よ亀さんよの唄を、可愛らしい子供の口からきいても、なんだか亀が陰険でいやだ。

夏の下町の風情ふせいは大川から、夕風が上潮あげしおと一緒に押上げてくる。洗髪すあし、素足ぼんちよ、盆提ぼんちよ灯うちん、涼台すずみだい、桜湯さくらゆ——お邸方おおだなや大店の歴々には味えない町つづきの、星空の下での懇親会だ。湯屋ゆやより、もちつとのびのびした自由の天地だ。まず各自めいめいの家が——家並はなびが後景はけいになって天下の往来が会場だ。その時は、もし、お長屋に警官さんがいても、その人もまたほんとの人間にかえって、胸毛を出して、尻をまくりあげて、浣しづうちわ団扇ででバタバタやって来会される。おかみさんの肌抜きも咎とがめなければ、となりのお父さんの禪てん一つなのも当り前なのだ、真てん真しん爛らん漫まん、更けるほど話はずむ。何処どこでもする怪談ばなし、新聞がいまほど行き渡らないから旧幕時代の、垢あかのつききつた「お岩様」で声をひそめてゐる。夜六時すぎから「お岩様」のはなしをすると怪異があるというのだ。そら引窓しんないがあいた！　なんて、年甲が斐いもなく妙な声を出すのもある。

新内しんないが来る、義太夫ぎだゆうがくる。琴と三味線を合せてくるのがある。みんな下手へたではない、

聴き巧者が揃っているからだ。向う新道の縁台でやらせている遠く流れてくる音を、みな神妙に聴入っている。生活に幾分余裕があったのでもあろうが、お三日に——朔日、十五日、廿八日——門に立つ物乞も、大概顔がきまっていた。ことに門附けの芸人はもらいをきめているようだった。女太夫の名残りもあつたのだろう。家によっては煙草の火をもらって話してゆくのもあつた。琴三味線の合奏は老女が多かつた。みなといつてもよいほど旧幕臣のゆかりだつた。縁日はずれの方に、小さく敷ものをして、紙がとばないように小石をおいて、お家流の美事な筆跡で、すらすら和歌や詩を書いては、一枚書くと丁寧に辞儀をする品のよい老女がいた。落魄でも手や顔に垢をつけていなかった。その前にしゃがんで、表札を書いてもらっているものや、手紙の上封を頼んでいるものもあつた。私はよく言われた、お前は、書籍ばかりすきだと、ああいう人になるよと。

小伝馬町の、現今電車の交叉点になっている四辻に、夕方になると桜湯の店が赤い毛布をかけた牀床をだした。麦湯、甘酒、香煎、なんでもある。このごろの芝居ではお盆でですが、一人だと茶台——真中に穴のあるものでも出した。その廻りには、煎りたて豆だの、赤に紫の葡萄の絵を描いた行燈のぶどうもちだの、飴やが並んだ。金米糖やもあつた。金花糖やも人形町に店があつて、招き猫は大小となく出来ていた。嚙る

とガランドウとムクとあつた。廻り燈籠や、ほおずきやが夜の色どりで、娘たちが宵よい暗みにくつきりと浮いて匂におつた。

浴衣ゆかたと行ぎようずい水が終いちにち日の勞れを洗濯して、ぶらぶら歩きの目的は活動もなくカフエもない、舞台装置のひながたと、絵でいった芝居見たままの、切組み燈籠どうろうが人を寄せた。

横山町や、薬研堀やげんぼりあたりの大店では荒い格子戸の、よく拭き込んだのをたてて、大戸を半分だけおろして、打水をして見せていた。わざと店はあまり明るくはなかつた。そして店はキッチンと取りかたづけられて、誰も——小僧一人いはしなかつた。そういう家の前を離れると、すぐ傍が黒い蔵であったり、木口のよい板塀であったりして、天水桶てんすいおけや、金網をかけた常夜燈じょうやとうが灯つていたように覚えている。日本橋にはそういう古風なところが多く、いつまでも残されていた。

燈籠の中味は、背景も人物も何もかもが切りぬいた錦にしきえ絵なのである。三枚つづき五枚つづき、似顔絵のうまい絵師のが絵草紙屋の店前にさがると、何町のどこでは自来也じらいやが出来たとか、どこでは和唐内わとうないの紅流べにながしたとか、気の早い涼すずみだい台たいのはなしの種になった。そしてよく覚えていないが、脚フットライト光などの工合もうまく出来ていた、遠見へは一々上手に光りがあててあつた。曾我の討入りの狩屋かりやのところなどの雨は、後に白滝しらたきという名で

売出した、銀紙のジリジリした細い根がけ（白滝として売出したのは、今の左団次のお父さんが白滝とかいう織姫になった狂言の時だったと思う）を、上から下へ抜いて、画心に雨を面白く現わしたりしていた。白い菅糸（これもバラバラした根がけ）でこしらえたのもあった。

何処の家で、今年は素晴らしい切り組みが出来たと噂されるほどなので、なかなか手を尽して、横長角な遠見を、深くせまくした、丁度舞台の額縁の通りなのが、三面ある家も、四角にして四面あるうちもある。一幕目二幕目と続いたのや、または廻り舞台のつづきや、一番目の呼物と中幕と、二番目のを選んだり、更にまたその家の鼻唄役者の当り役ばかりを選んで幾場もつくったりした。前に言ったような、動かして見せるのではなく、三尺からのものを四ツも五ツも飾って見せるのもあった。職人衆のうちのは景気よく明つぱなしで、店さきへ並べて、奥の人たちも自慢そうに簾のかげで団扇づかいをしながら語りあっているのもあった。その上にも景気をつけて新内をやらせたり、声色つかいを呼んでいるのもあった。

絵双紙屋の店には新版ものがぶらさがる。そぞろあるきの見物はプロマイド屋の店さきにたつ心と、劇好きと、合せて絵画の観賞者でもあるのだ。

子供というものは、ふとした時にきいたことを生涯忘れぬものである。あんぼんたんの幼心にしみついたのは、前にも書いたかもしれないが、太胡さんという、何か不平を蔵していたらしい酒のみの壮士が、私がほおずきをふくんでいるのを見て、たつた一言激しくたしなめたことがある。それからフツツリほおずきを鳴らさない、器用に何でも鳴るのだが——出たての空豆の皮などを、ついふツと吹きはするが、すぐ苦さがこみあげてくる。も一つは父のいったことばで、ある時、父はしみじみと、幼い私に言うような事でない言葉^{もつら}を洩した。よほど胸につまっていたのであろう。

「四民平等の世の中なのに——俺^{おれ}はいけない。なあんだ、当り前だと思いつながら、情けな^{なさ}いことに町人根^{こんじょう}生^{しょう}がぬけないのだな、心ではそう思いながら、つまらない奴に、自然と頭が下がりやがる。甚^{ひど}いもので、代々植付けられて来た卑屈だ。いめいましいが理屈じやどうにもならない。お前なんぞは、そこへゆくと、生れた時から自由の子だ、どんな奴にも、頭あさげるな、おんなじ人間だぞ。」

私は父を愛す。晩年に近く失敗したけれど、それは殆^{ほとん}ど父の仕業^{しわざ}ではないほど私の知る父とは矛盾した事だった。私の筆はやがて其方へも進んでゆくであろうが、そこでは弁護しないが、父の壮年時代を知り、晩年を知るものは、なにのためにかを考えさせられる。

父は後にいった。長く考えていたことを、ふと迷って、そしてまた長く悔ゆると——
父の人格ひとがらがすこし変つたのは、中年過ぎて男の子が出来てから、母の狂愛に捲込まれ
てからだつた。私につぶやいてきかせたころは、実に好きな父だつた。夜、客のない時、
お膳ぜんを前にしてチビチビやりながら書籍しょもつを読んでいる。私を前におくのがくせだつた。ふ
と気がついて書物から眼を離すと、おとなしく膳の前に座っている私に、お肴さかなをつまんで
口に入れてくれた。（それは四つ五歳のころのことだが——）私は父が傍見わきみをしながら猪お
口ちよこを口にはこんで、このわたが咽喉のどにつかえたのを見てから、いつも鉢はさみをもつて座つて
いた。

父は私を友達のように、とんでもない場所ところへまで連れてゆく。薬研堀やげんぼりのおめかけさん
のところへ連れていったまま、自分は用達ようたしに出してしまうので、私は二、三日して送りか
えされる。ついて来た老婢ろうひが、なにかと告つげ口ぐちをするのに、私は何も言わないので母に大
層折檻せつかんされたりした。

またある時は吉原へ連れてゆく。桜の仲之町の道中も、仁和加にわかも見た。金屏風きんびょうぶを後に
して、アカデミックな椅子いすに、洋装の花魁おいらんや、芝居で見るとような太夫たゆうは厚いふきを重ね
て、椅子の上に座り前に立派な広帯を垂らしているのを見た。せまい道巾みちはばのところへい

ったら、小さな店に、さびしげにいた黒い白粉おしろいをつけたようなお女郎が「おちやびんだ」とどなって、煙管キセルを畳に投げつけたので、私はびっくりして、格子にぶるさがついていた手はずしてベソをかいた。ある時は芝居につれていった。よわむしな私は芝居がこわくて、大きらいだったのに連れて行っては失敗していた。新富座しんとみざに時の大名優九世市川団十郎が「渡辺華山わたなべかざん」をして、切腹の正念場の時、私は泣出したのだそうだ。父は私をかかえて家まで送って来て、折角のところを見そくなつたとこぼしていた。そんな事は度々であった。私はかなり大きくなつてからでも、芝居茶屋の二階に、ポツネンと、あねさまを飾つたり、ボンヤリ考えたりして一人で居残つていたことが多かつた。

それより困るのは撃剣げっけん大会というようなどころへ連れてゆかれる事だ。私の姪めいや甥おいがボート選手の古いのお父さんにもつて、その季節シーズンに連れてゆかれると、お父さんの熱狂奔走ぶりに悲しくなるといったが、私の父の撃剣の場合もそうだった。小っちぼけな子供なんぞ袖の下にはいつてしまつて、父は棧敷さしきにがんばる。吃驚びっくりするような気合をかける。ト、ト、ト、ト、トツ、そら突け！ と呶鳴どなる。私は縮みあがつてしまつて、父は殺されはしないかと思つた。やがて自分も引っぱり出されてゆく。ゴチャゴチャになると、どれが誰だか分らないので、私は帰れるのかしらとベソをがまんしている。

国会開設前の時流は、三多摩の壮士が竹鎗やりで、何百人押寄せてくるのなんのと、殺伐な空気であったと見える。政談演説会や討論会もよく開かれた。ある折両国の福本という講談席亭で、講談師なのか壮士なのか、あるいは弁士なのか、またはそれらの交りなのかその処は記憶が誠にはつきりしていないが、擬国会みたいなものが催うされたらしい。例によつて私は父に連れられていった。自由党の人たちが多く来ていたのであろう。あれは中島だよとか、あれは誰だよとか種いろ々な名をきいたが覚えてはいなかった。ただ、父と論じあつたので板倉中いたくうちゆうという人の、赤ら顔の、小肥りの顎髭あごひげのある顔と、ずんずら短い姿と名を覚えてゐる。この時も、正面の棧敷さしきにいたが、大きな声をするので私は閉口していた。それに、どこでも吠鳴るので溜息が出た。

父は刀が好きだった。暇があると拭ぬぐいをかけたり粉こなを打ったりして、いつまでもあきずに眺めていた。磨とぎに出したりするのも好きだった。燈火の下でやる時もあるが、昼間でも静しずかなときには一室を締めきつてとじこもっていた。そんな時、母は大きらいで自分からさきに避けた。

「そらお父さんがはじめた、みんな退どいておいでよ。」

私はなんとなしに、父の仕事に興味をもった。よく傍そばにいた。父は顎あごであっちへいつて

いろと指し示した。私は室のそこから覗のぞいていると、父は居合を——声もかけずに、すらりと座ったままぬくのを試している。二ふり三振り刀を振って、また惚ほれぼれと見ている。みだれとか、焼刃の匂いとかいうものを教えてもらったのもそのころだ。

私と父との静な問答がはじまる。

「お父さん剣術つかいがいい？」

「うん。」

「絵かきがいい？」

「うん。」

「なにが好いいの？」

「お父さんはな、八歳か九歳の時分手習師匠が大変可愛がつてくれた。するとな、雷かみなり師匠といわれた手習のおしよさんの近所に国くに年としという絵かきがいてな、絵を教えてください、これも大変可愛がつた。その時分東むこうりよう両く国くにに、万八という料理おちややがあつて、書画の会があるかめだほうさいと亀田かめだほうさい鵬ひと斎ひとという書家や有名な絵かきたちが来てな、俺われを弟子にしようとみんなが可愛がつてくれた。その頃の人たちが、紙へかいてくれた絵え話ばなしのような絵が沢山あつたのを、祖おじいさん父おじいさんが丹念にとつておいてくれたのだが、どうしてしまったかなあ。どつち

かになつておけばよかつたのを、祖母が、商人がいいといつて丁銀という大問屋へ小僧にやられた。」

それがな、といつて父は私のおかつぱの頭に手をおいた。

「丁銀のおばあさんも八釜しやで、灸が大好きだから、祖母の気が合つてたんでやられたのだ。」

「では小僧さんでもお灸を据えられたの！」

あたしは大きな父が痛ましかつた。私とおなじように、やっぱりお灸を据えられたのかと——そして祖母がよくはなす、

「祖父が丸の内のお出入り屋敷へゆくと、向うから、葉包紙のように日にやけた小僧が、白い歯をだしてニヤニヤ笑いながら来るので、よく見たら家の息子だつた。」

父は色が黒くて菊石があつたから、この上黒く干しかためた小僧だつたら、どんなに汚なかつたらうと思つた。

——父はよく言つた。菊石という号をつけようと思つたが、溪石の方がよからうと、なんとか葱という人がつけたのだと。

だが、父の若い血は算盤そろばんをはじくまで辛棒しかねて、お玉ヶ池の先生千葉氏の門下になつて、先生には可愛がられたが、親や近所から鼻つつまみになつた。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

流れた唾き

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>